暮らしのぞき箱

季節を知ったら暮らしが楽しくなった

~第六四号~

立秋（りっしゅう）

八月七日

雷さま

地震、雷、火事、親父と恐れたのはいつ頃のことでしょうか。雷親父は不在となりましたが、雷は健在。むしろ温暖化が進む現代ではますます猛威をふるうようになりました。俳句では夏の季語となっていますが、夕立が多い立秋の頃は雷が多いので用心したいものです。

先日、宇治へ会議のために出かけたら、ちょうどバケツをひっくり返したような夕立に遭いました。雷もゴロゴロと景気よく鳴り、全身ずぶぬれになって、ようよう会議室へ着いたところ、主催者が「雷（神鳴）は神が鳴るとも書くように、伊勢に来て、まさに神様に迎えられたようです」と挨拶されました。白川静著の『字通（じつう）』によると、神という漢字の「申」は雷光が屈折して走る形が由来で、神威のあらわれを意味しているとのこと。積乱雲の内部で引き起こされる放電現象である雷を、古代の人々は神さまの意思と受けとめていたのです。

その神さまをまつる伊勢神宮の取材中にも雷雨に遭いました。木々に覆われた神域の中で、社殿が建つ正宮（しょうぐう）は唯一森が開け、しかも大屋根の千木（ちぎ）には金具がつき、先が尖って、いかにも落雷が心配されます。伺ってみると、正宮の四隅の高木に避雷針を取り付け、雷除けをしているとのこと。ほらっと指差す梢を見れば、金属棒がしっかりとありました。

ちなみに明治から昭和にかけての内宮前の出来事をつづった『秘木草紙（ひめこそうし）』には、「両宮へ避雷針の設立されしは明治三十五年の三月也」と記されています。神宮ではもう百年以上前から雷除けがなされていたのですね。神さまも恐れる雷といったところでしょうか。

文　千種清美

伊勢内宮前　おかげ横丁